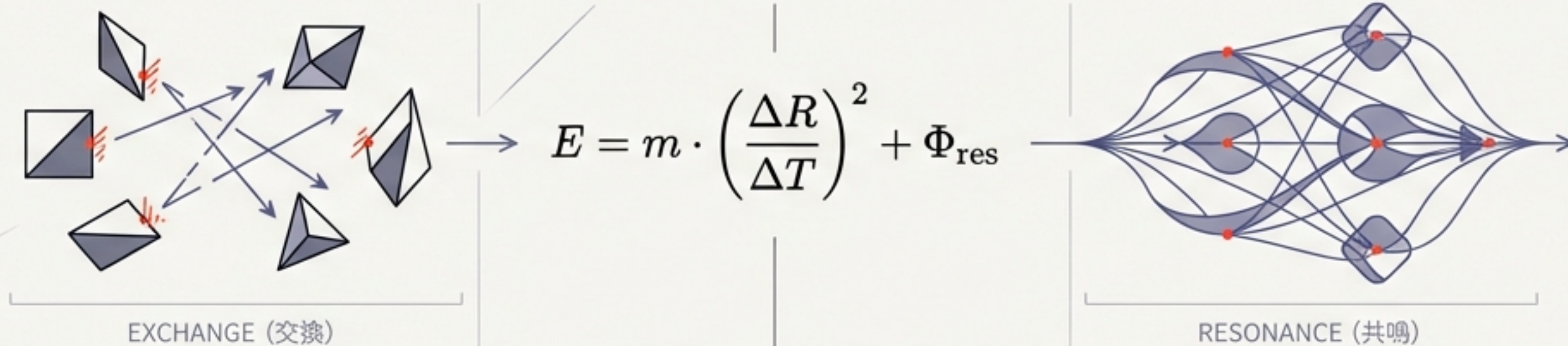


# 価値の物理学の再定義

「交換」から「共鳴」へ——共鳴市場OS一般理論 (C系 Vol.1)

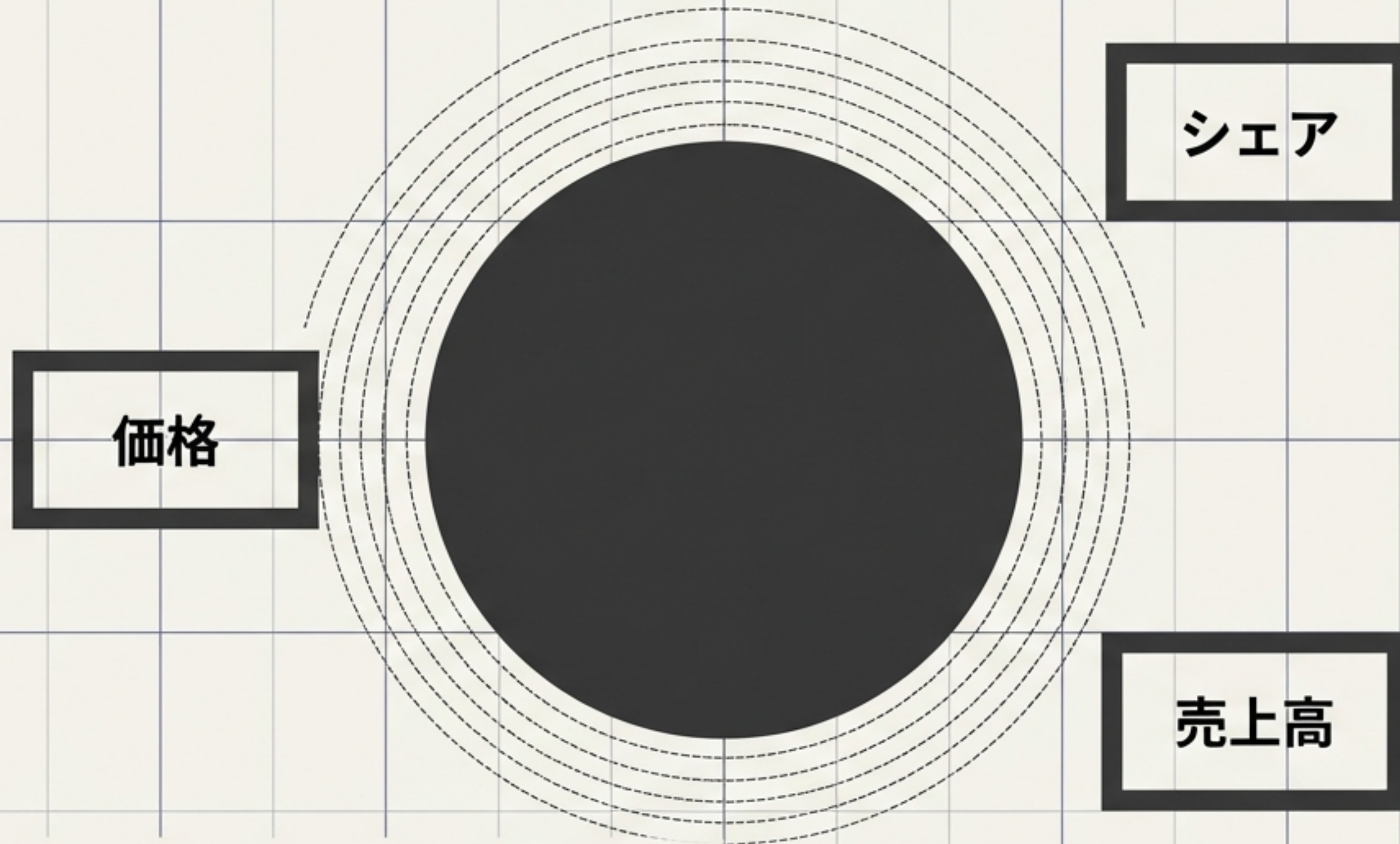


# 市場は「戦場」ではなく、「磁場」として振る舞う。



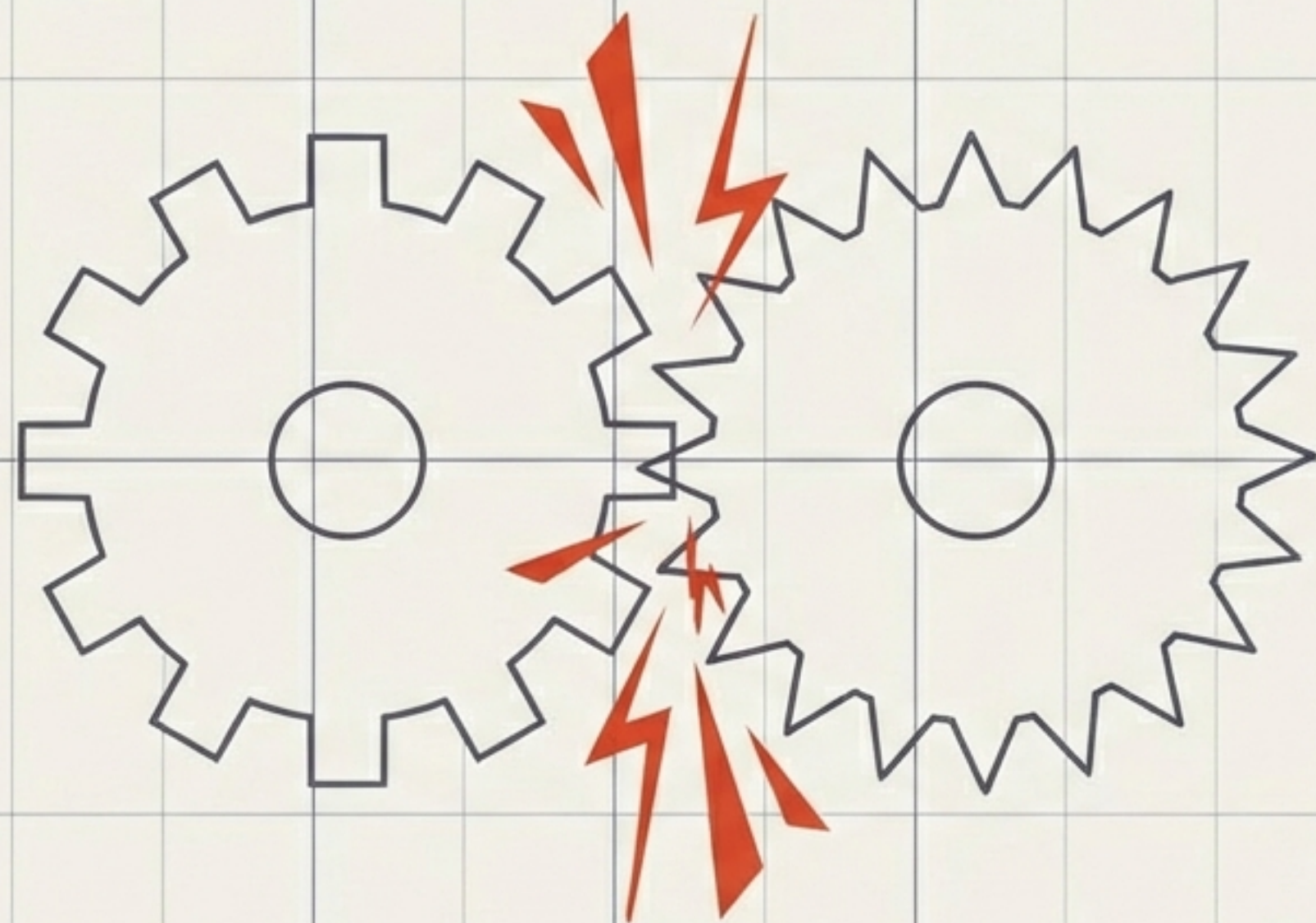
- 従来の市場は、欠乏を前提とし、比較と競争によって資源配分を行う「戦場」であった。
- 新文明OSが提示する市場は、明確な因果法則に従って振る舞う「構造空間」である。
- これはイデオロギーではない。物理法則の書き換えである。

# 崩壊する旧市場（Legacy OS）—— 価値の「スカラ量」化



旧来の市場は、価値を「大きさ（Magnitude）」のみで測定してきた。  
向きを評価しない市場では、どんな力も無差別に増幅される。  
結果として、情報の非対称性を利用した 利ざや抽出と搾取が正当化される。

[ 摩擦ロス = 説得コスト ]

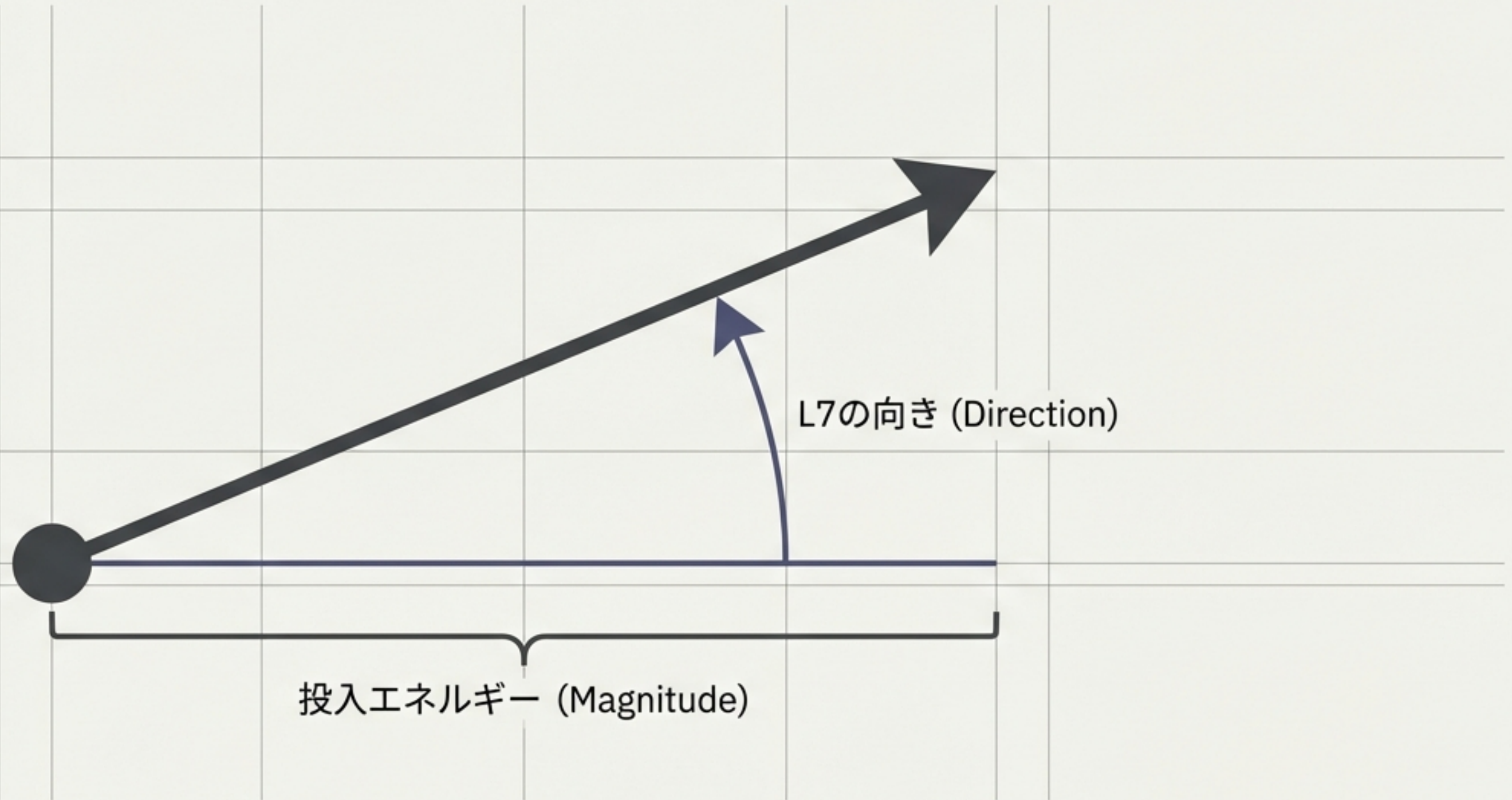


**「説得」は、構造的ズレを  
補正する摩擦である。**

旧市場において「売る」行為の中心には説得があった。  
しかし構造的に見れば、説得とは「向きが一致していない  
状態を無理に接続するための補助装置」に過ぎない。

無理な接続は、長期的には必ず疲弊と搾取（E）を生む。

## 価値のベクトル化 — 「大きさ」と「向き」の統合

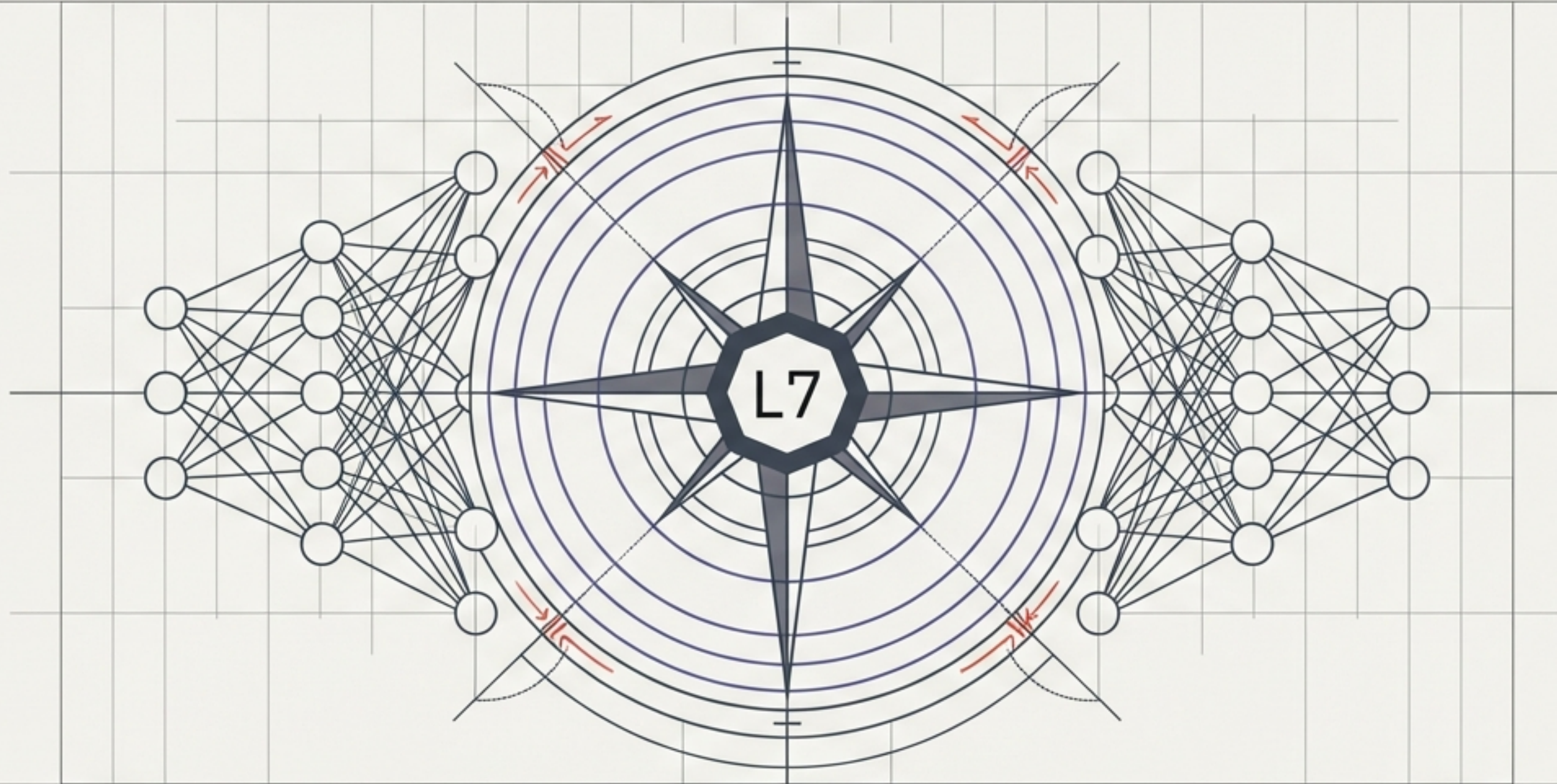


共鳴市場において、価値はベクトル量として扱われる。

どれほど大きなエネルギー（大きさ）を持とうと、向かう未来の構造（向き）が合致しなければ、価値は接続されない。

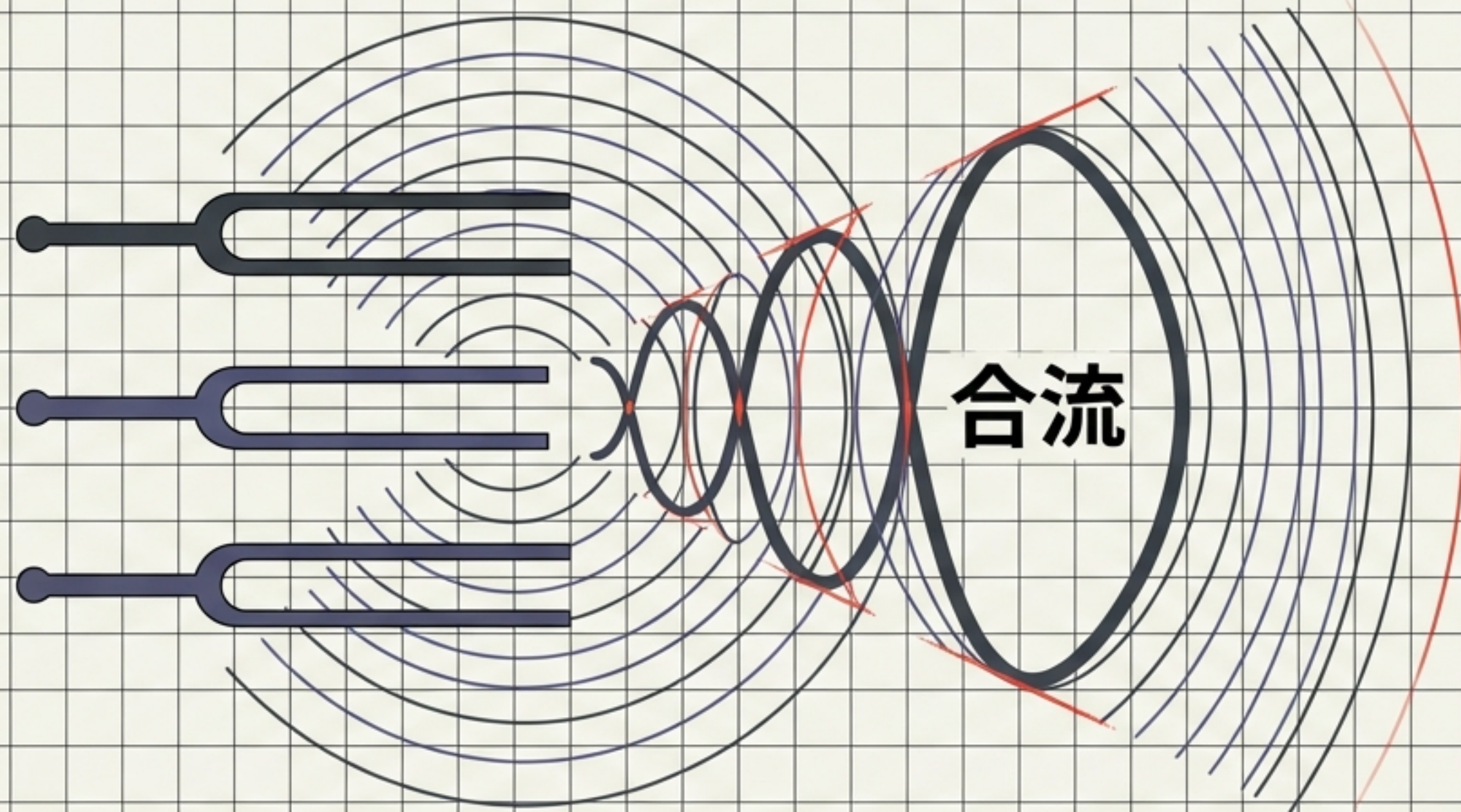
向きが合わない限り、取引は成立しない。

## L7：行動を決定する深層の「固有振動数」



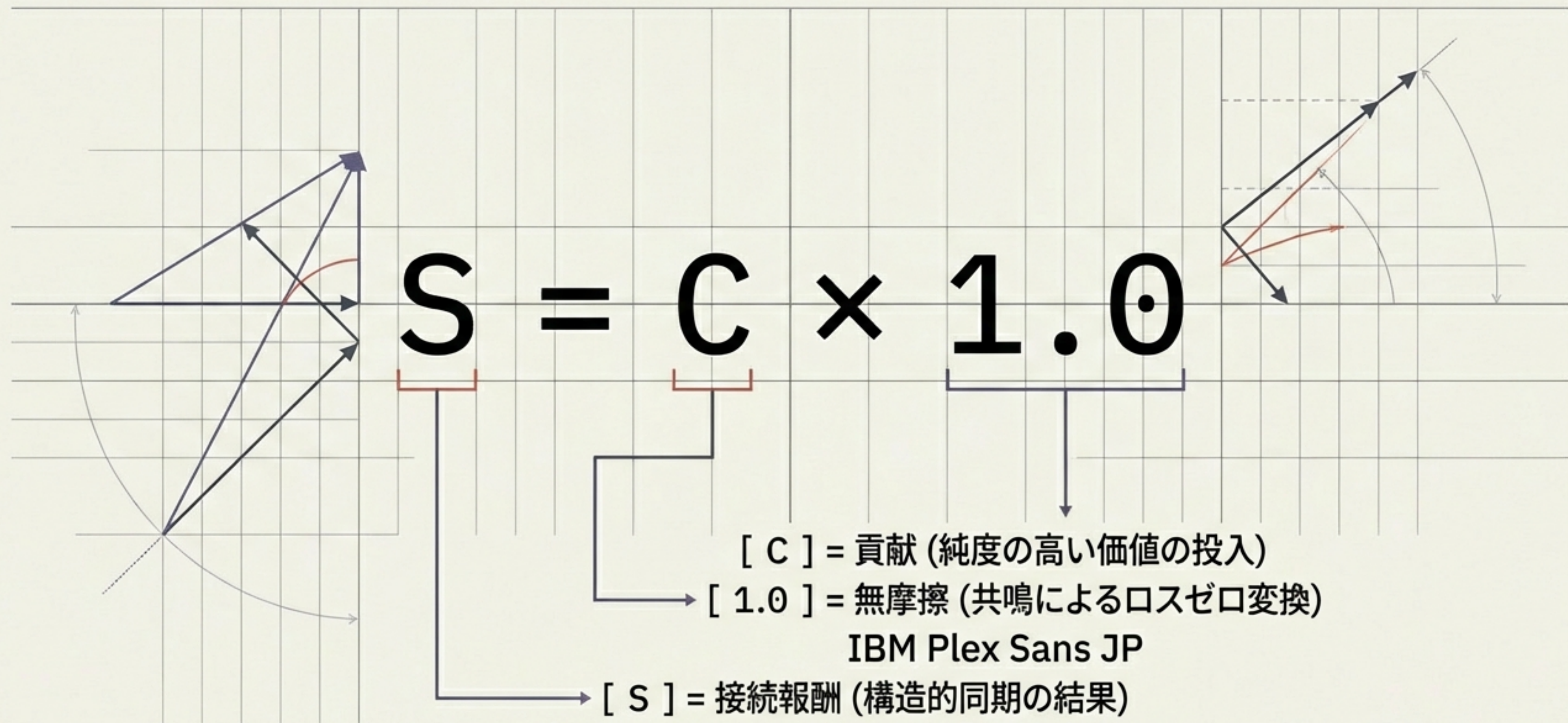
L7とは、その主体が「どの方向の未来を実現しようとしているか」を示す深層の評価関数である。経済主体は、このL7に沿って動く限りエネルギー消費が最小化される。逆らうと、努力量は増え、疲弊が生じる。

# 共鳴 (Resonance) —— 説得から「合流」へ

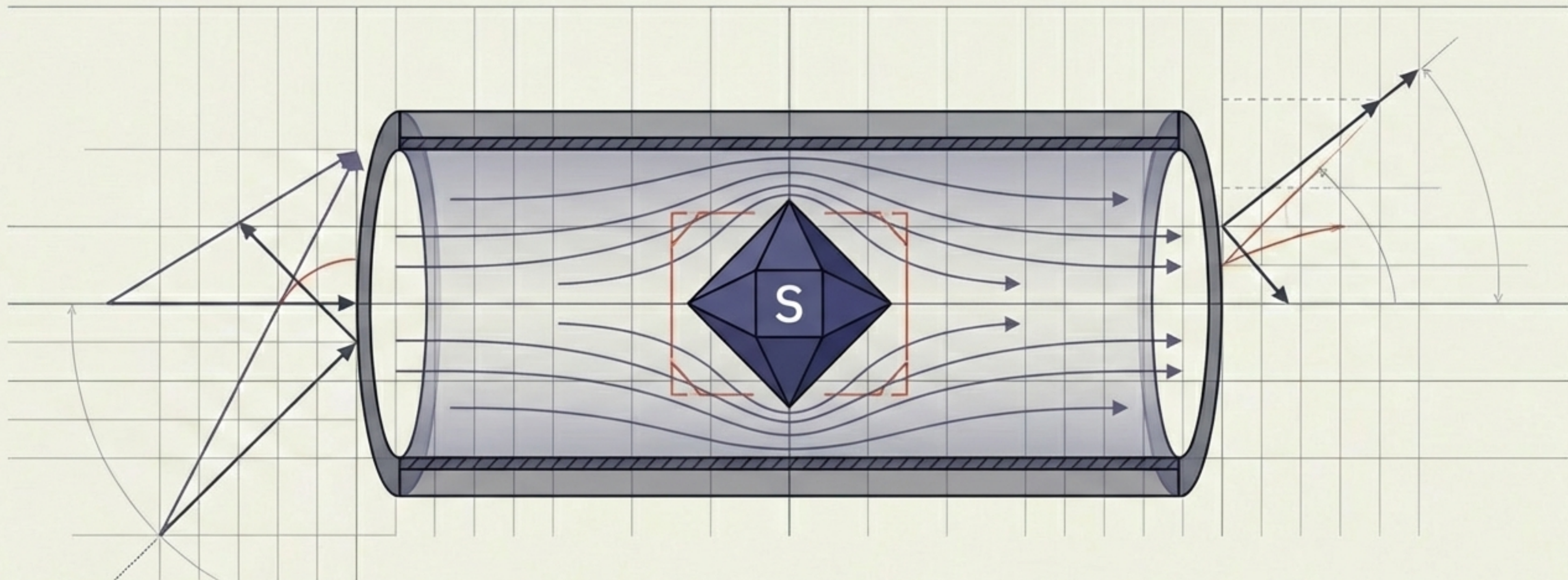


提供者と受領者の L7 が同じ方向を向いたとき、取引は「説得」ではなく「確認」となる。  
固有振動数が一致した対象同士は、最小の摩擦で最大の成果を増幅し合う。  
これが、共鳴市場における取引 (=合流) の物理的メカニズムである。

# 新文明の方程式



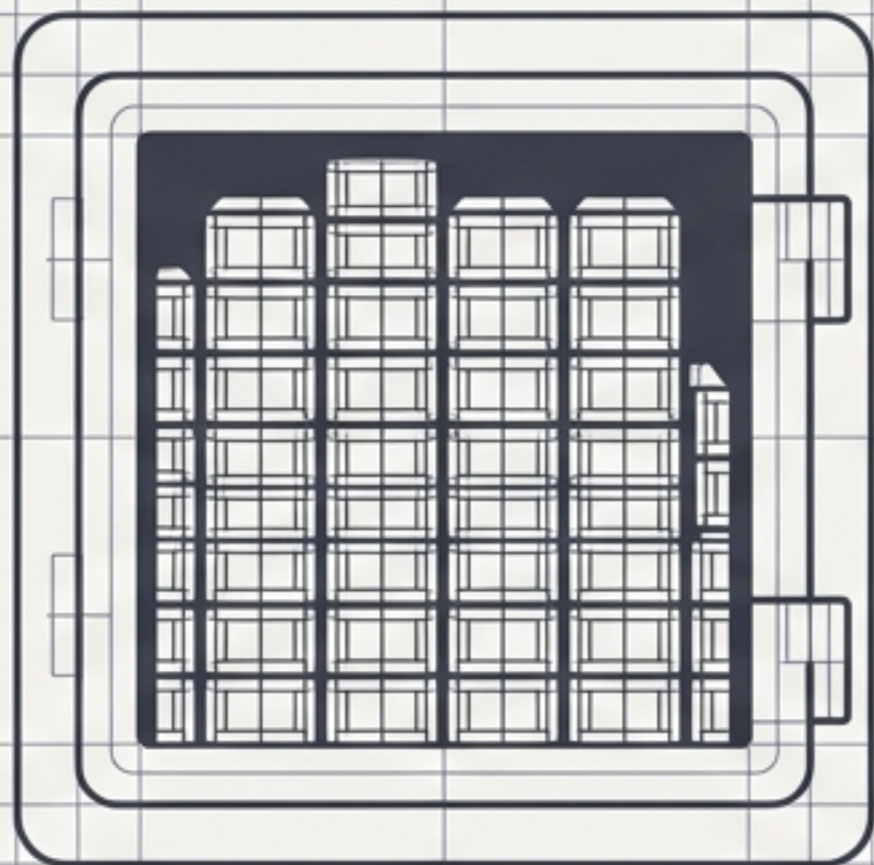
## S: 貨幣が運ぶ「真の報酬」



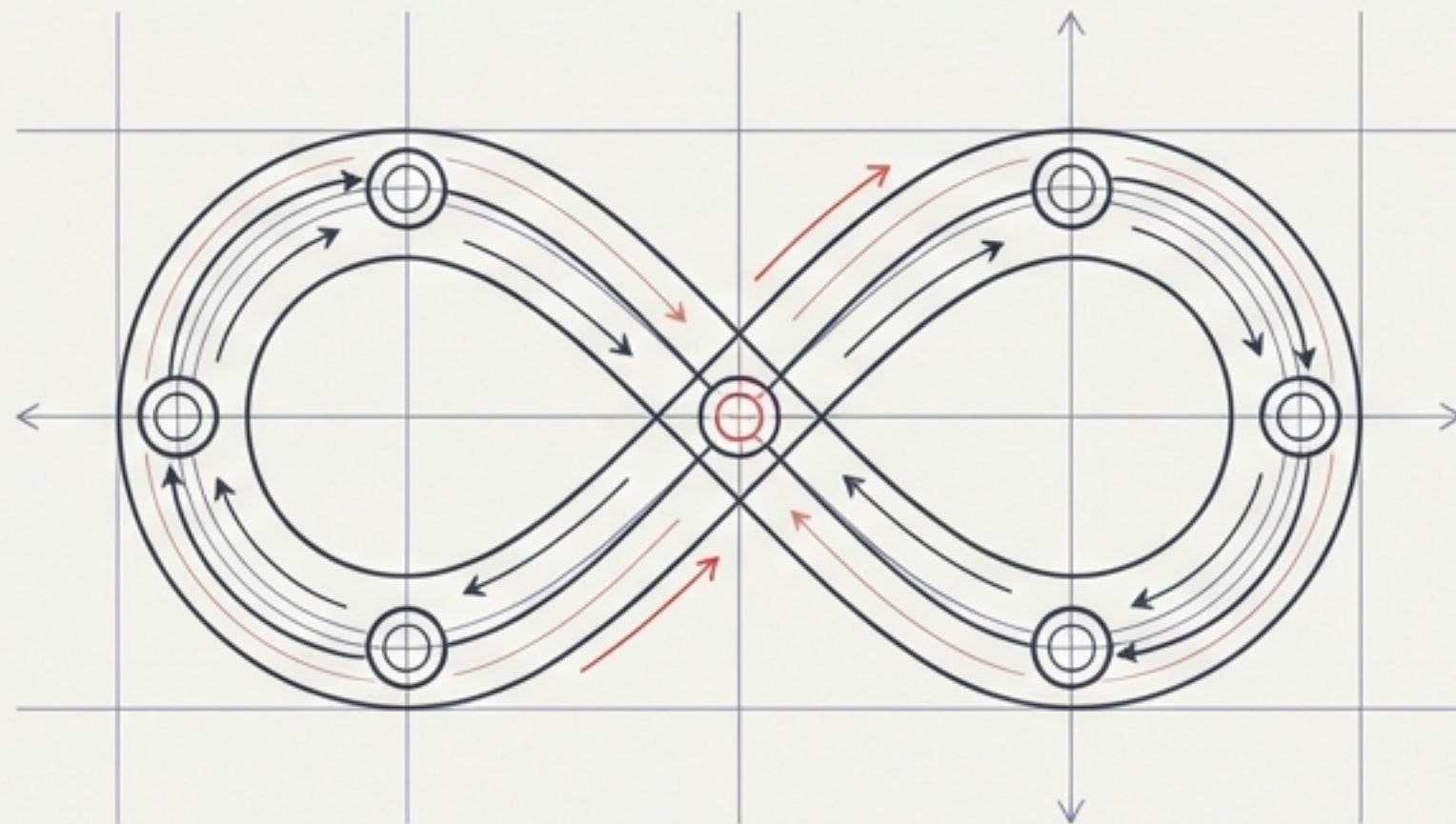
金は価値そのものではなく、価値の移動を可能にする媒体（血液）に過ぎない。  
Sとは、価値ベクトルが整合した接続が成立したときにのみ発生する「構造的報酬」である。  
努力や交渉では増えない。接続の純度によってのみ決まる。

# 富の再定義 —— 蓄積（ストック）から循環（フロー）へ

旧市場の資産 (Stock)



共鳴市場の資産 (Flow)

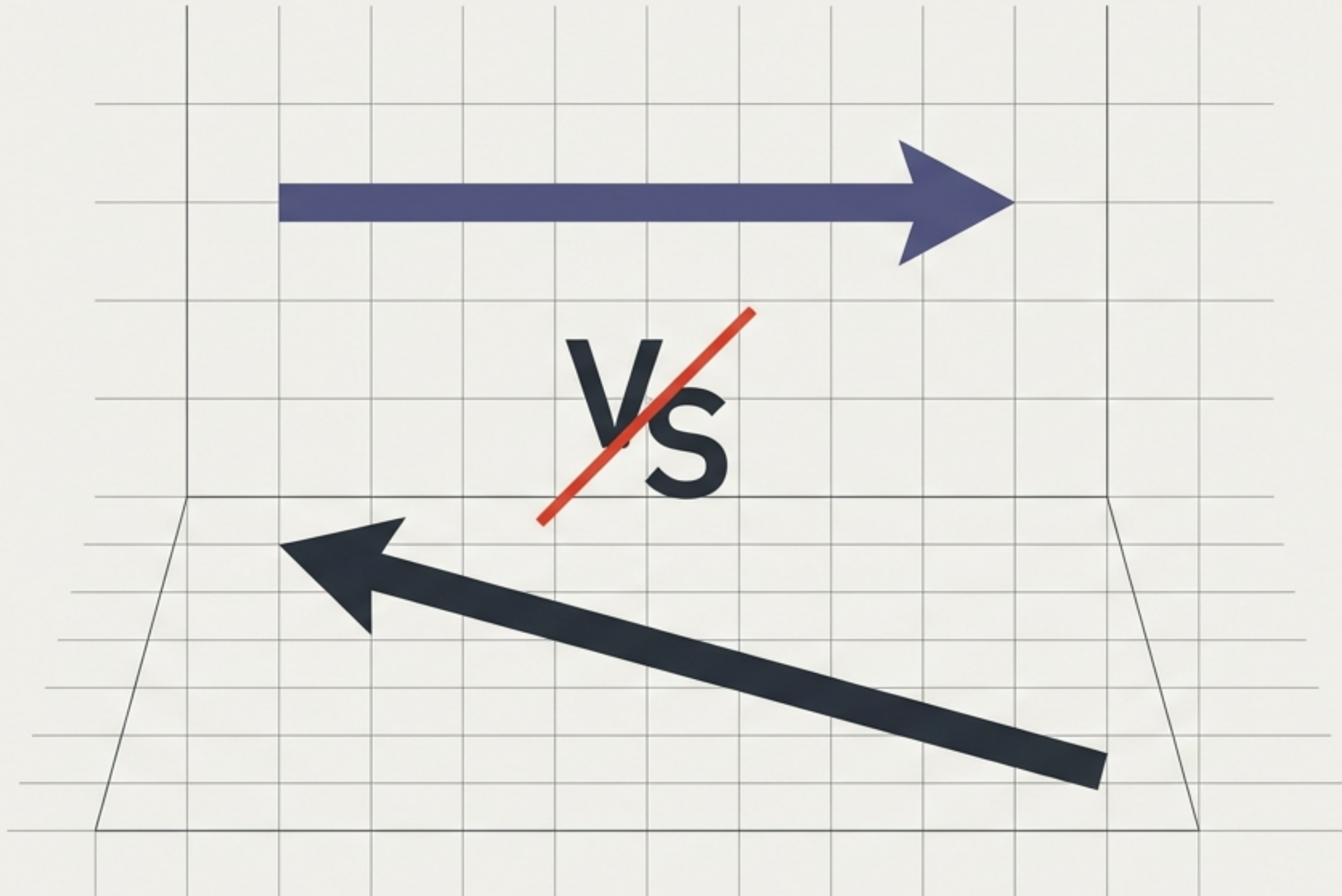


旧市場の資産 = 「どれだけ溜め込んでいるか」(預金、不動産)。

共鳴市場の資産 = 「いざという時、どれだけの共鳴接続が動くか」。

Sは所有できない。循環が成立した結果として通過する報酬である。

# 比較の消滅、競争の終焉



比較可能であること自体が、  
競争を強制する。

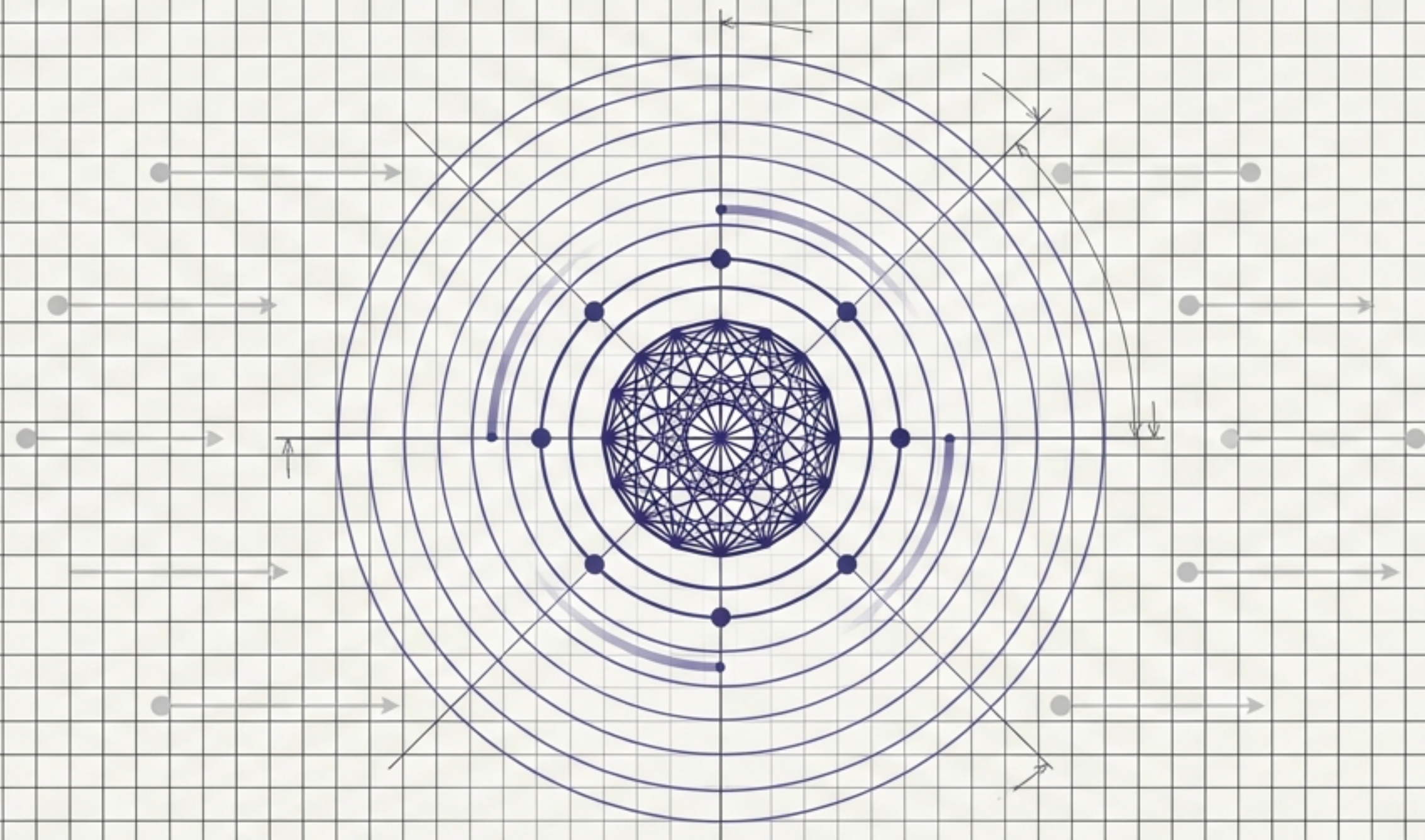
価値がベクトル化された瞬間、  
競争は構造的に崩壊する。

向きの異なるベクトル同士は、  
比較そのものが意味を持たない  
からだ。

競争は不要となり、市場は  
多様性を保ったまま安定する。

# 固有重力圏 — 狩猟（セールス）から誘引（シグナリング）へ

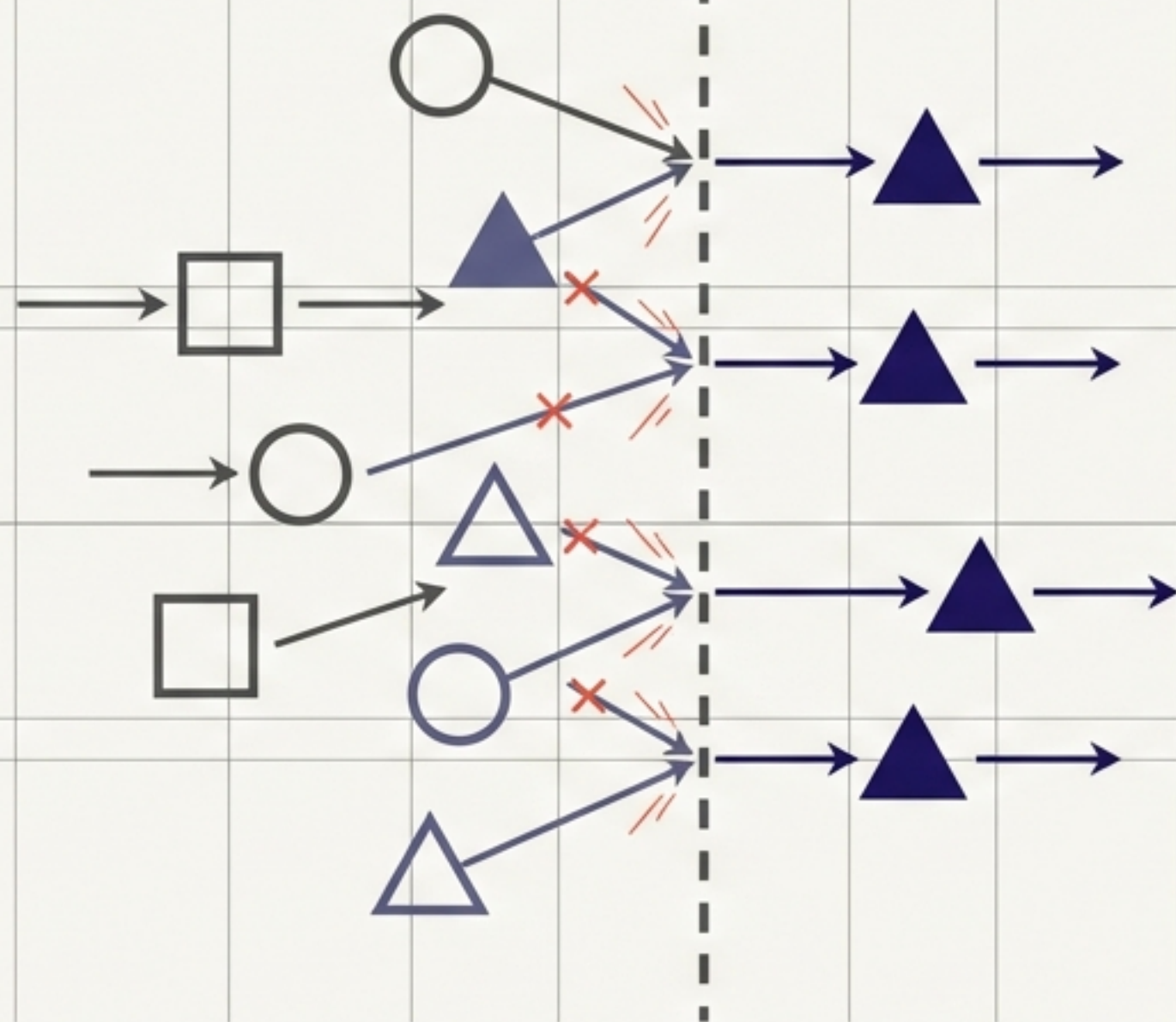
DEF: 固有重力圏 (Gravity Zone)



L7を歪めずに発信し続けると、自然な引力（重力）が発生する。  
媚びず、誰にでも合わせることをやめたとき、市場は「選別」の場となる。  
顧客は「選ぶ」のではなく、重力圏に「引き寄せられる」。

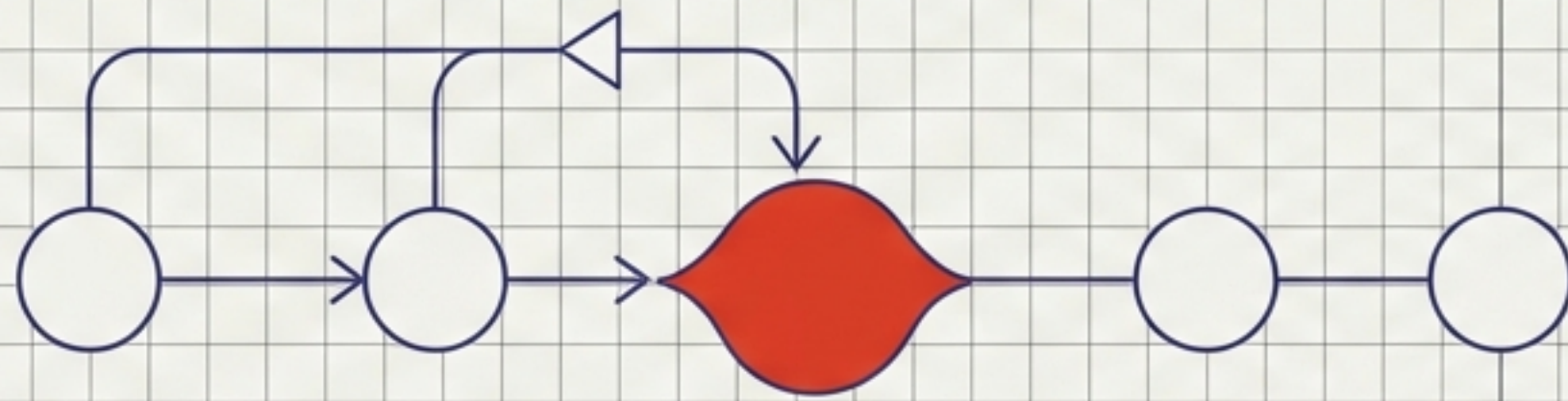
## 境界線の設計 —— 「価格」は踏み絵である

DEF: 価格の踏み絵 (Price as Filter)



共鳴市場において、価格は対価ではなく「覚悟の検出器」として機能する。  
関係性が不可逆な「同志」へと変質する事象の地平線 (Event Horizon)。  
安売りを構造的に禁止し、共鳴体の純度を極限まで守り抜く。

## E の正体 — 「悪」ではなく「循環不全」



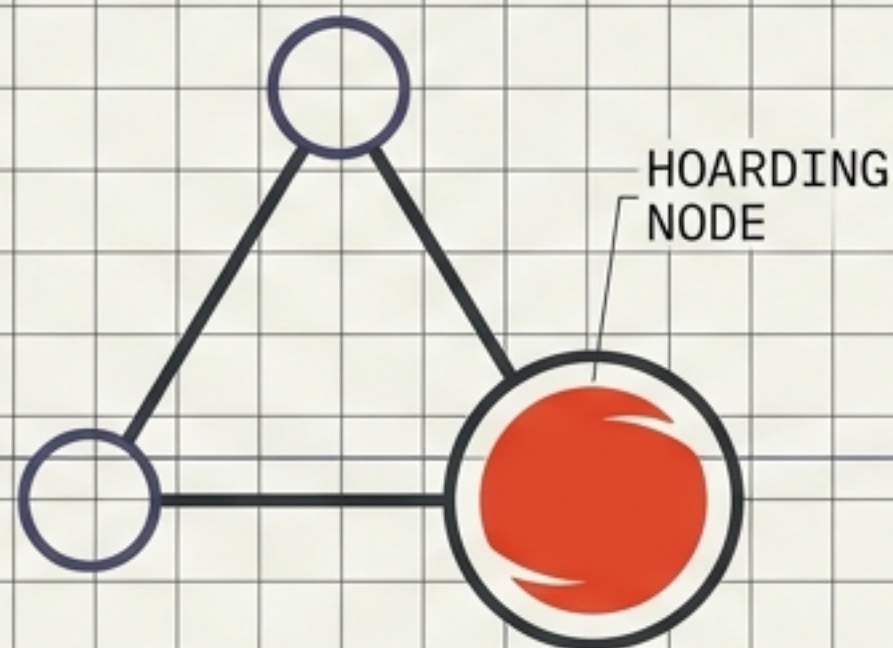
搾取 (E) とは、倫理的逸脱ではなく「構造的な機能停止」である。

得られたCやSを内部に閉じ込め、他者や次のプロセスへ流さない動脈硬化。

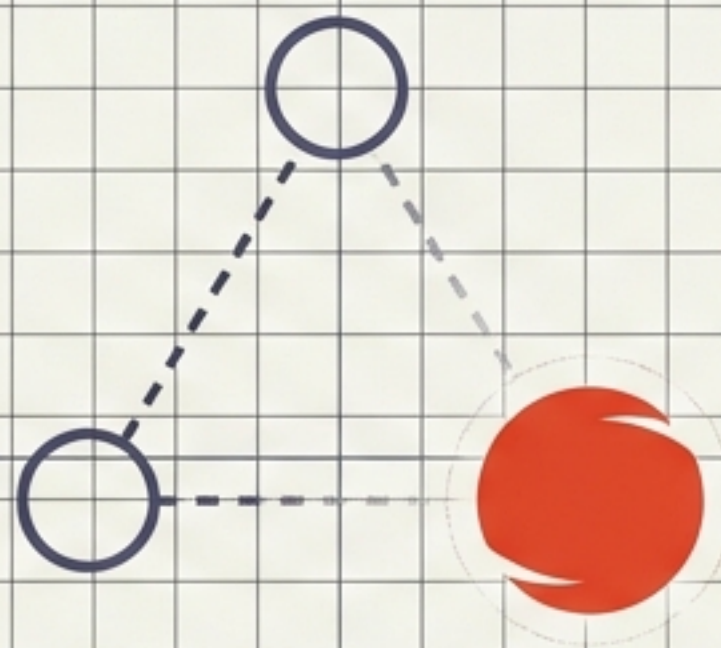
共鳴は継続的な同期現象であり、流れが止まった瞬間に死滅が始まる。

# 自動浄化システム — 罰なき市場の免疫

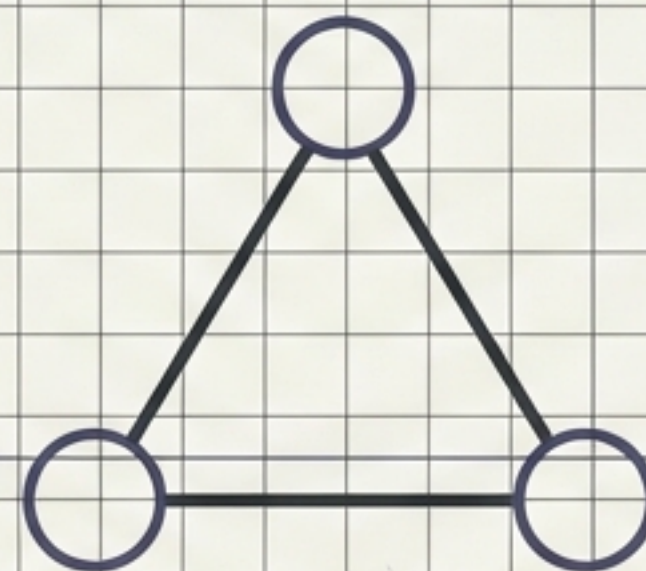
1



2



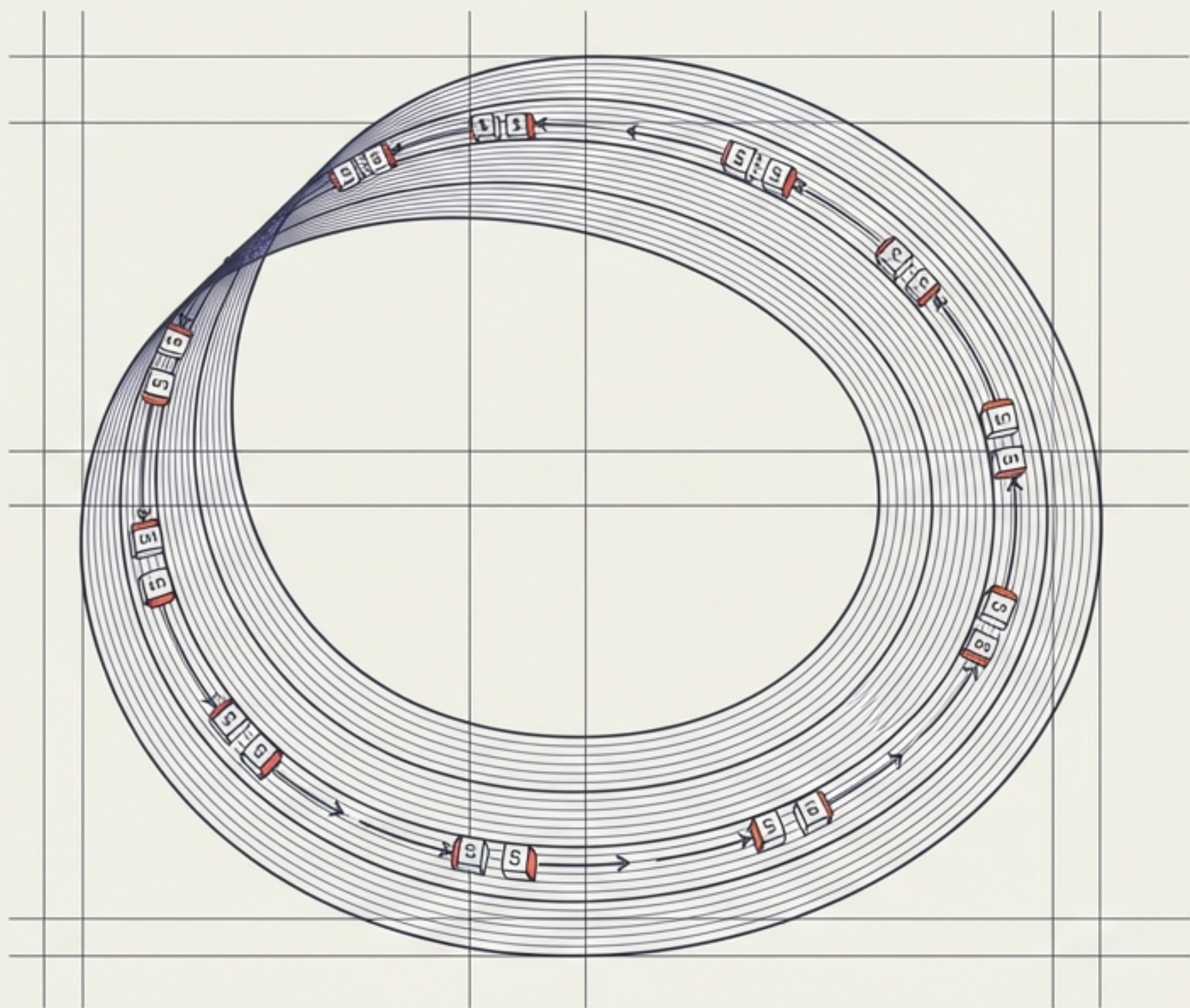
3



循環を止める主体を、罰する必要はない。

同期が解け、接続が減衰するという物理現象によって、自動的に中心から外れていく。  
流す者が満たされ、止める者が枯渇する。これは倫理ではなく力学である。

## 循環の永続化 — 「還流」という設計原理

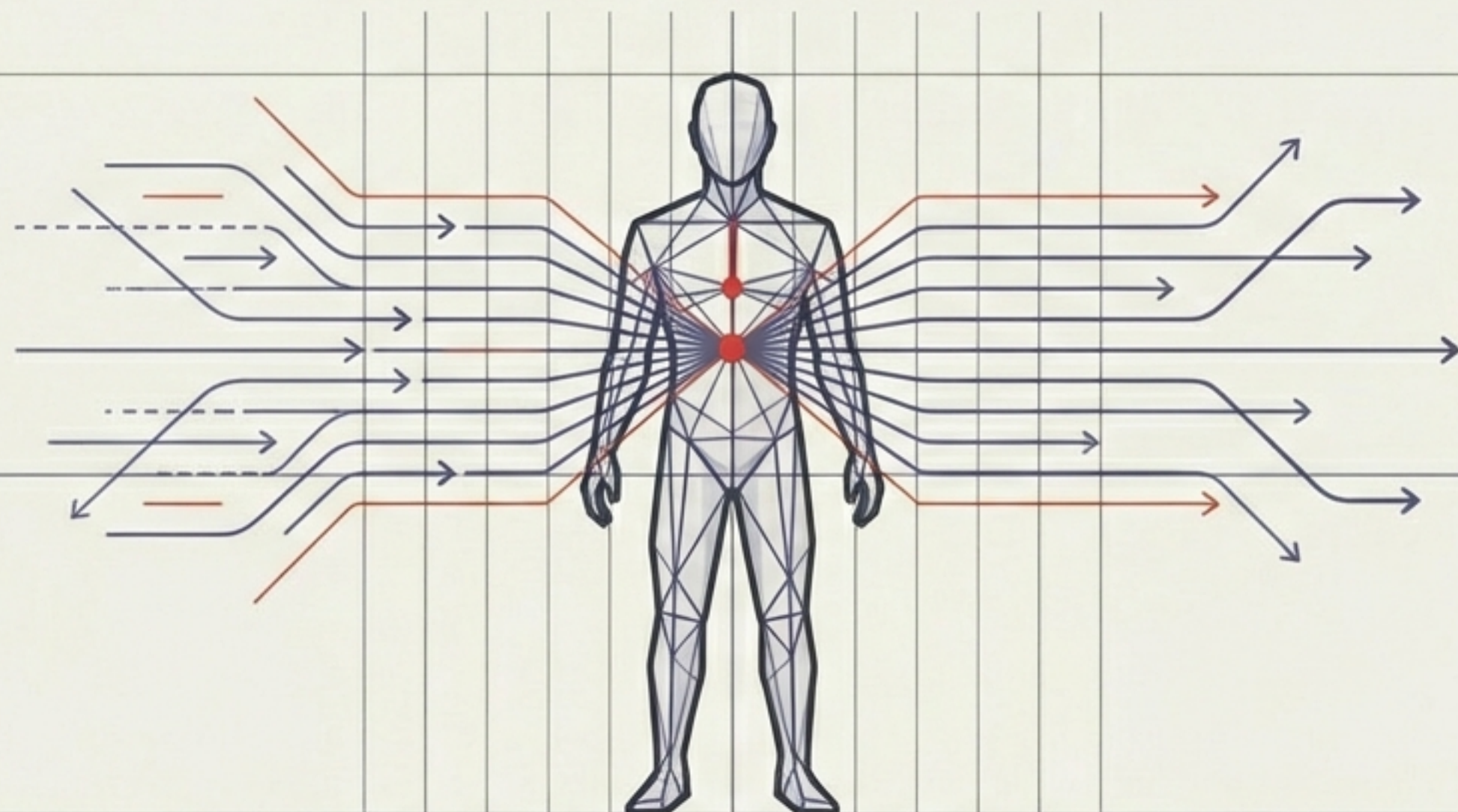


得られたS（接続報酬）を、再びC（貢献）として同じL7圏内へ流し戻す行為。

無差別な寄付ではなく、向きの揃った還流だけが、共鳴を指数関数的に増幅させる。

市場を「使う対象」から「生かし続けさせた続ける構造」へと変える。

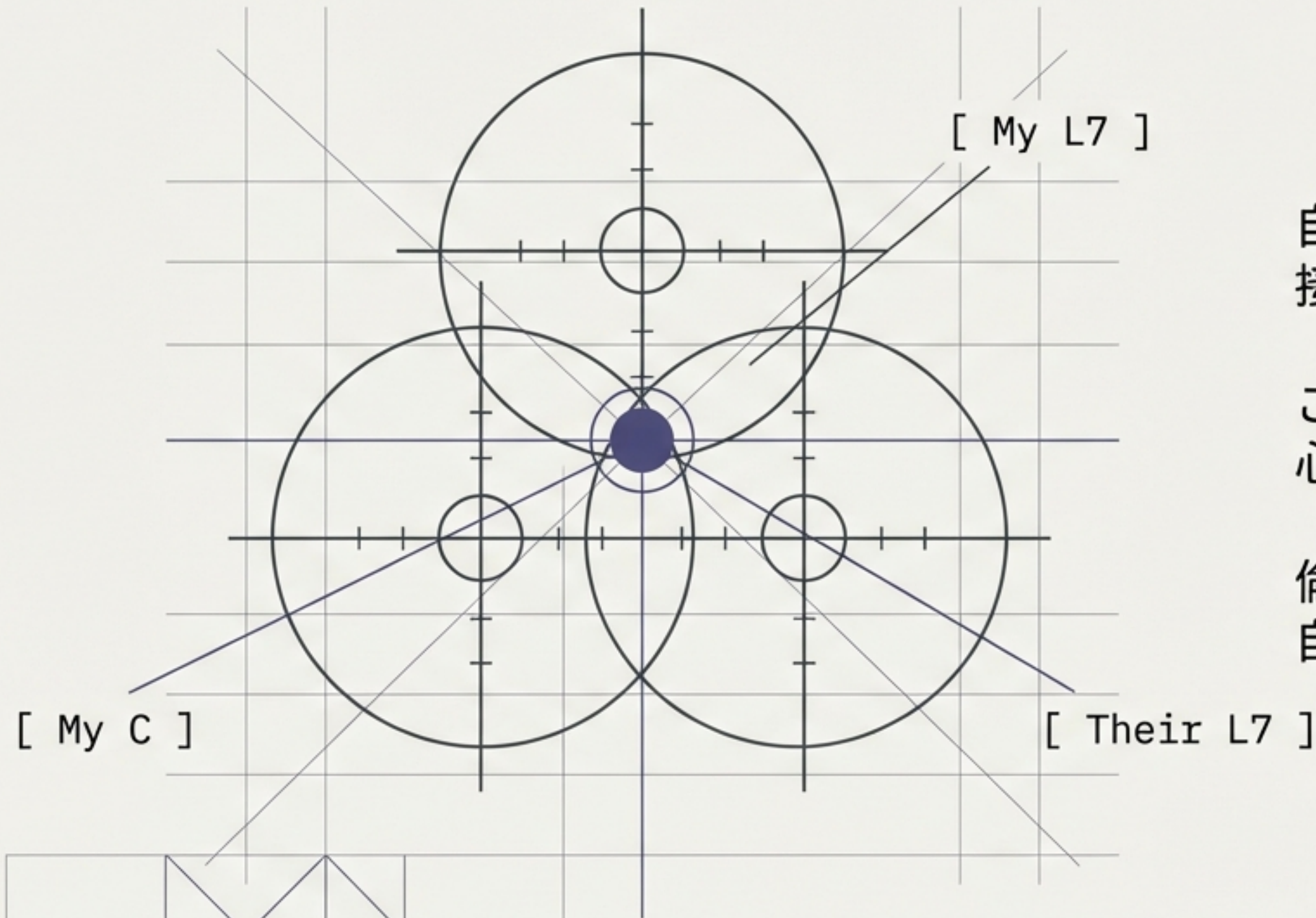
## 経済人の死と、「共鳴的接続人」の誕生



自己の利益最大化を狙う「合理的経済人」は、共鳴市場では最大の損失を生む。

新たな主体は、価値の所有者ではなく、循環の「結節点」として振る舞う。  
成功とは「どれだけ持っているか」ではなく「どれだけ流しているか」である。

# 最適化の対象は「利益」から「整合」へ

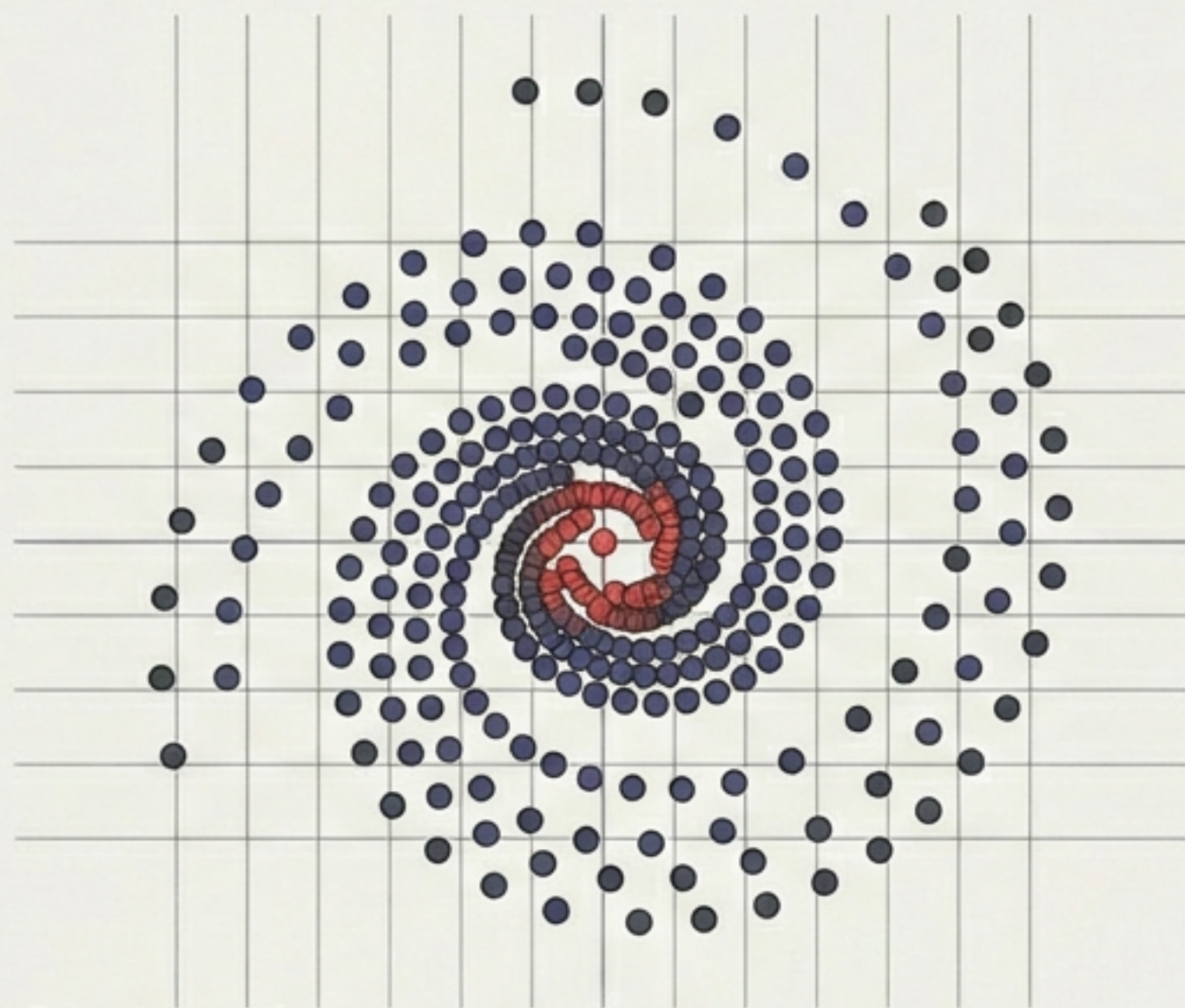


自らの灯火 (L7)、提供する価値 (C)、  
接続先の世界観 (他者のL7)。

この三者が一致したとき、経済活動は  
心理戦から物理現象へと昇華する。

倫理的でない構造は、共鳴を起こせず、  
自動的に沈降する。

# 市場は「現象」として立ち上がる



市場とは、あらかじめ存在する「場」や「容器」ではない。

それぞれが自らの灯火に従い、整合した接続を重ねた結果として、事後的に立ち上がる「重力場」である。  
市場に参加するとは、市場を構成することそのものである。

## 共鳴市場への参加条件

この市場は、誰にでも開かれているわけではない。  
だが、排除によって閉ざされているわけでもない。

条件は一つ。

「自らを循環の一部として引き受ける意思がある  
かどうか」である。

# 一般理論実装仕様書 — 完了

## [ Theoretical Signature Declaration ]

本理論は、特定の思想への同意を求めない。  
価値の向きを引き受け、循環の一部として行動する意思を持つ主体にのみ、理解可能な市場像を描き出す。

Origin Signature:  
中川マスター / Nakagawa  
Master

NCL-ID:  
NCL-α-20251230-2f9949